資料2
科学技術・学術審議会
人材委員会（第114回）
令和8年3月24日

文部科学省

「科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業」の事業終了に伴う振り返りについて

令和８年３月24日

文部科学省 科学技術・学術政策局 人材政策課

「科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業」の概要

事業目的

○ フェローシップ事業の開始の背景として、博士後期課程における経済的な不安と研究者としての将来のキャリアパスが不透明であることが相まって、博士後期課程への進学者数・博士号取得者数はいずれも減少傾向にある状況であった。

○ このような背景を踏まえ、修士課程から博士後期課程に進学する優秀な人材の確保を図るため、**将来の我が国の科学技術・イノベーション創出を担う博士後期課程学生の処遇向上とキャリアパスの支援を全学的な戦略の下で、一体として実施**する大学を支援した。

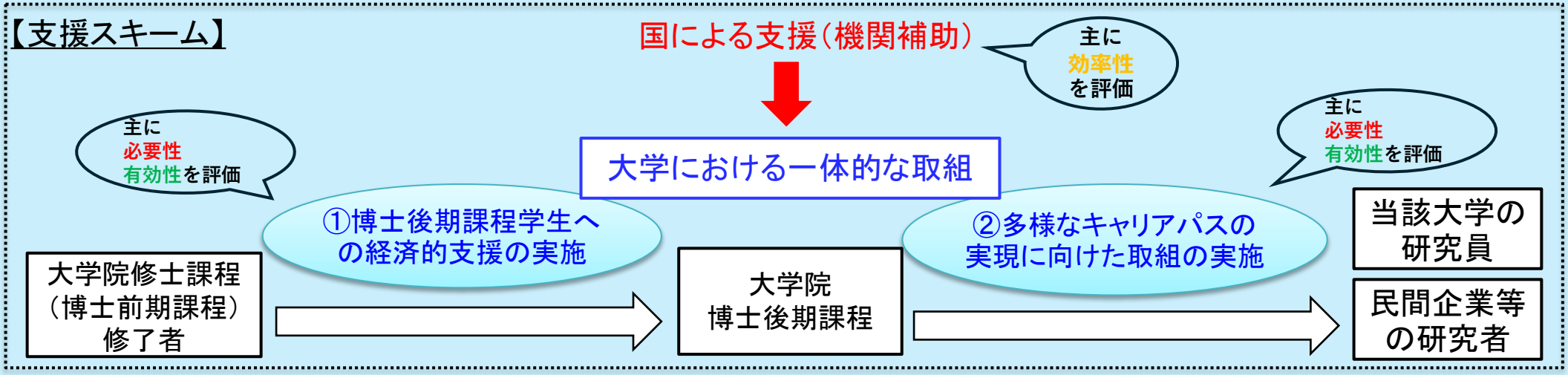
事業概要

① 博士後期課程学生への経済的支援の実施
（研究専念支援金：生活費相当額（180万円以上）の支援を含むフェローシップ）

価値創造の源泉である基礎研究・学術研究の卓越性と多様性を維持・強化していくため、
・ボトムアップ型（各大学が将来のイノベーション創出等を見据えてボトムアップで提案）
・分野指定型（国がトップダウンで分野を指定）の2タイプを設定した。

② 多様なキャリアパスの実現に向けた取組の実施（博士課程修了後のポストへの接続）

民間企業等と連携し、ジョブ型研究インターンシップや共同研究等の人材育成プログラムの活用等を各大学で実施した。



「科学技術イノベーション創出に向けた大学フェローシップ創設事業」の概要（続き）と振り返りの趣旨

事業概要（続き）

○ 予算：令和2年度補正予算：　480百万円（準備事業として）
令和3年度当初予算：2,316百万円
令和4年度当初予算：3,368百万円
令和5年度当初予算：3,601百万円
※令和4年度以降については、財源を創発的研究推進基金に一本化し、SPRINGと可能な限り一体的に運用

○ **支援大学数：47機関、82件** ※採択当初
うち、ボトムアップ型：37件
分野指定型：45件（量子10件、情報・AI17件、マテリアル18件）

○ 支援学生数：（令和3年度）延べ1,039人
（令和4年度）延べ2,067人
（令和5年度）延べ2,982人
（令和6年度）延べ　52人

本振り返りの趣旨

○ 本事業の事後評価は、公募要領上では「取組終了年度の翌年度（10年度目）」である令和12年度に実施する予定であったが、**令和7年度ですべての大学が次世代研究者挑戦的研究プログラム（SPRING）に移行し、令和6年度をもってフェローシップ事業としては終了したため、この度、プログラムとしての事後的な振り返りを行う**。なお、各大学のプロジェクト事後評価については、令和5年度、令和6年度のSPRINGの公募の際にすべての大学が審査を受け、SPRINGに移行しているため、評価は完了している。

○ 振り返りの観点として、本事業が人材育成を主な目的としていることに留意しつつ、政策評価法3条1項に挙げられている、**「必要性」、「有効性」、「効率性」の観点を中心として、振り返りを行う**。

振り返りの結果～必要性～

本事業の必要性

評価項目（案）	評価基準（案）	
国費を用いた人材育成としての意義	定性的	各種政策文書等による政府方針と合致しているか
社会的・経済的意義、 科学的・技術的意義	定性的	研究活動及び産業・経済活動の活性化に資するものか

○ 米国や英国、韓国、中国においては人口比で増加傾向にあることに反して、我が国においては、博士号取得者数が長期的に減少傾向にあり、博士後期課程学生、特に修士課程から博士後期課程への進学者数・進学率を増やすことが我が国の研究力強化に向けて急務であった。

○ 修士課程から博士後期課程への進学者数・進学率は長年低迷している理由として、**「経済的見通しが立たないこと」や「博士課程修了後の就職の不安」**が考えられ、これらの原因に対処するために、**①博士後期課程学生への経済的支援**と**②多様なキャリアパスの実現に向けた取組**を実施する、フェローシップ事業は開始された。なお、**「第6期科学技術・イノベーション基本計画」でも生活費相当額程度を受給する博士後期課程学生について目標が掲げられた**。

参考：第6期科学技術・イノベーション基本計画（R3.3.26閣議決定）（抄）
博士後期課程学生の処遇向上とキャリアパスの拡大に関しては、様々な支援を必要とする学生の分析・フォローアップを継続的に進めるとともに、産業界の協力も得ながら、**様々な政策資源を総動員して一体的に取り組む。**（中略）**大学が戦略的に確保する優秀な博士後期課程学生に対し、在学中の生活から修了後のポストの獲得まで両方を一体的に支援する、大学フェローシップ創設事業を 2021 年度に開始し、所属機関を通じた経済的支援を促進する。**

○ 以上より、**本事業には必要性はあったと評価できる。**

○ なお、本事業終了後も、**博士後期課程学生への経済的支援及びキャリア支援の必要性は、より一層高まっており、**「第7期科学技術・イノベーション基本計画」（案）においても、日本人学生の博士後期課程への進学の重要性について言及がある。

参考：第7期科学技術・イノベーション基本計画（案）（抄）
（前略）優秀な博士後期課程学生の育成・確保のため、**特別研究員（ＤＣ）や次世代研究者挑戦的研究プログラム（SPRING）等により経済的支援を一層充実**させるとともに、博士人材のインターンシップ拡充など、産業界との連携を強化しつつ、**産業界でも活躍できる人材の育成も見据えた大学院教育の充実を図り、多様なキャリアパスの確立を推進する**。また、社会人学生も含めた多様な学生のそれぞれに適した支援となるよう、制度の改善・見直しを行う。

振り返りの結果　～有効性～

本事業の有効性

評価項目（案）	評価基準（案）	
人材の養成	定性的	・優秀な志ある博士後期課程学生の処遇改善に資するものか ・博士後期課程学生の進学率が上がっているか
見込まれる直接・間接の成果・効果やその他の波及効果	定性的	博士人材が幅広く活躍するための多様なキャリアパスの整備に資するものか

＜①博士後期課程学生への経済的支援の実施に関して＞

○　支援を受けた学生へのアンケートでは、**生活費相当額は「足りている」または「概ね足りている」と回答した学生が６割以上であり、支援額に対する学生の満足度は高い。**なお、生活費相当額である研究専念支援金については、半数以上（約64%）の大学が最低額とされた年額180万円に設定をした一方で、実質的な最高額である年額240万円と設定した大学は1割弱（約6%）であった。

○　**「研究時間が増えた」または「やや増えた」と回答した学生が８割以上であったことから、**研究専念支援金（生活費相当額）の支援により、**研究時間の増加にも貢献した**と考えられる。

○　**フェローシップ事業実施大学における博士後期課程への進学者**は、**令和6年度の事業終了まで漸増**している。

＜②多様なキャリアパスの実現に向けた取組の実施に関して＞

○　支援を受けた学生へのアンケートでは、**キャリアパスの多様化等の取組についても「役に立っている」、「やや役に立っている」が半数を超えており、キャリアパス支援の取組に対する学生の満足度は高い。**

○　**支援学生の就職状況**については、全支援終了学生（802人）の58%が就職をしており、**学業継続者を除いた場合の就職率は81.7%**であり、博士後期課程全体と比較して高い。

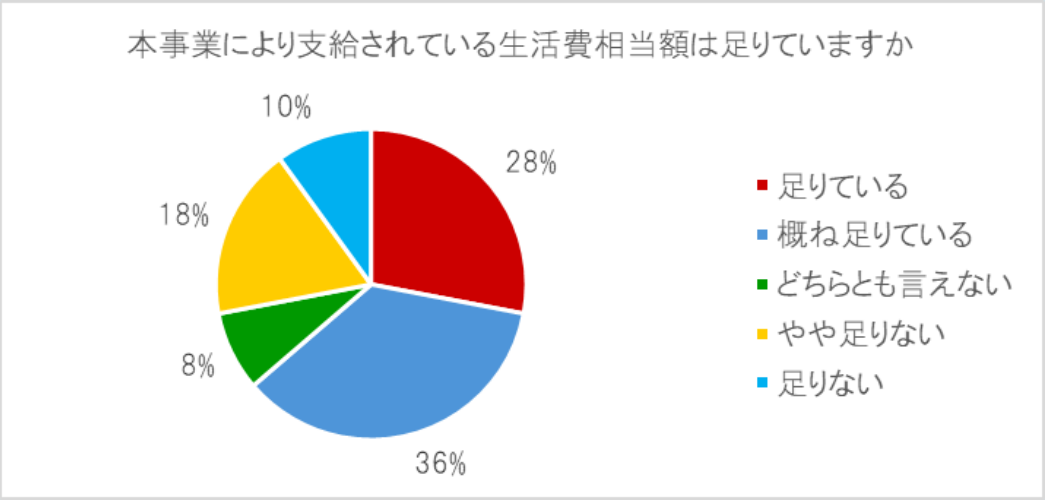
○　**支援学生の進路**については、博士後期課程学生全体と比較して民間（産業界）に就職する割合が高く、**48%の学生が国内ないし海外の企業、もしくは官公庁に就職**している。

○　以上より、**本事業には有効性はあったと評価できる。**

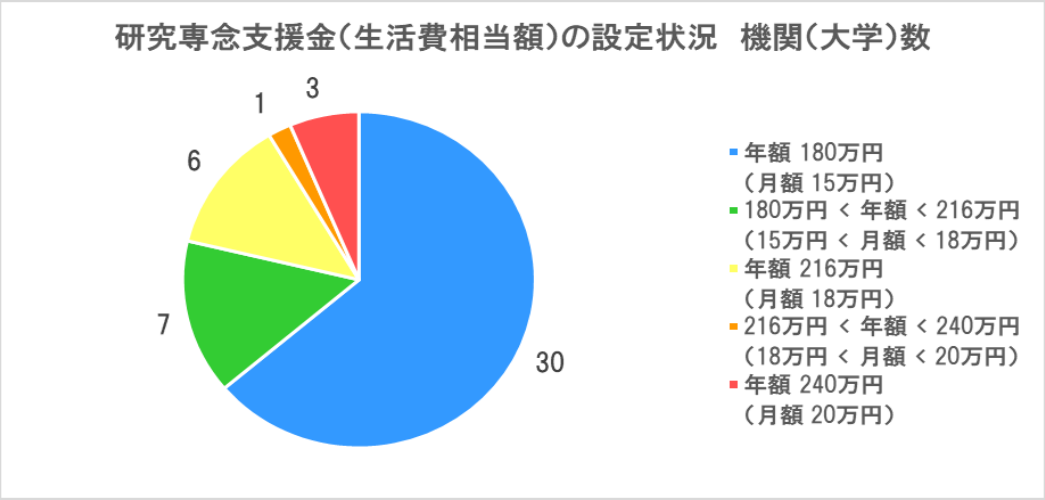
（参考）有効性に関わるデータ（博士後期課程学生への経済的支援の実施に関して）

※ いずれも科学技術振興機構(JST)調べ

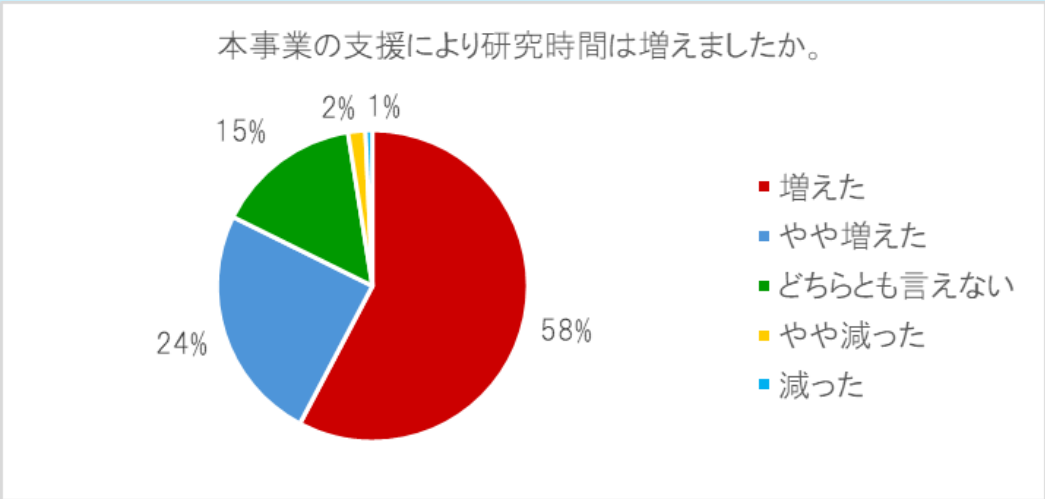
支援学生に対するアンケートの回答（生活費相当額について）



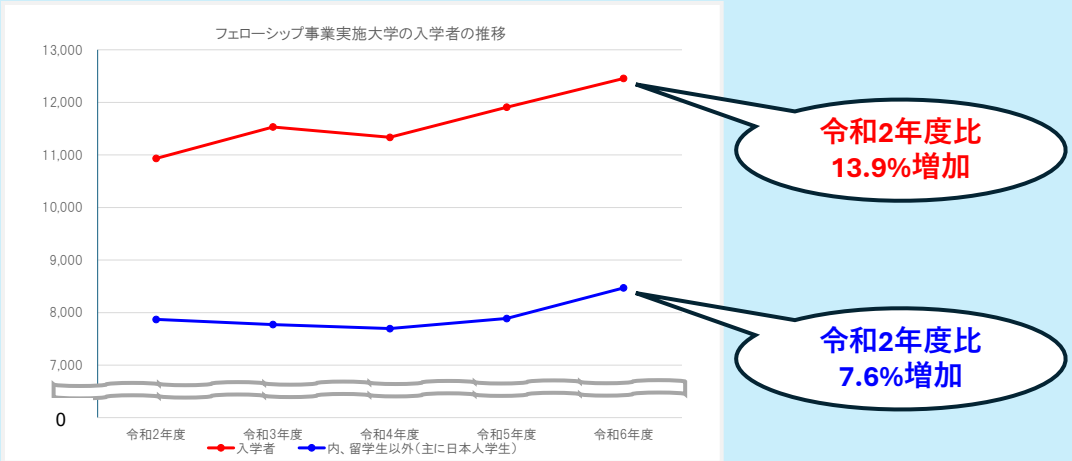
研究専念支援金（生活費相当額）の設定状況



支援学生に対するアンケートの回答（研究時間について）



フェローシップ事業実施46大学の博士後期課程入学者の動向

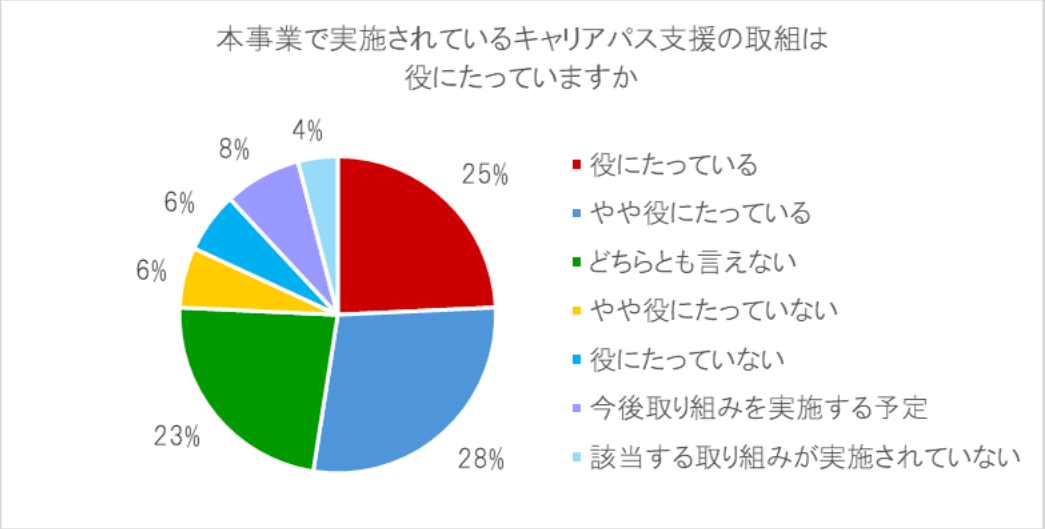


※「学校基本調査」を基にした、令和2年度から令和6年度の博士後期課程学生**全体**の入学者数は**7.4%増**（14,629→15,744）
うち、留学生以外（主に日本人学生）に限った場合は**5.0%増**（12,038→12,645）

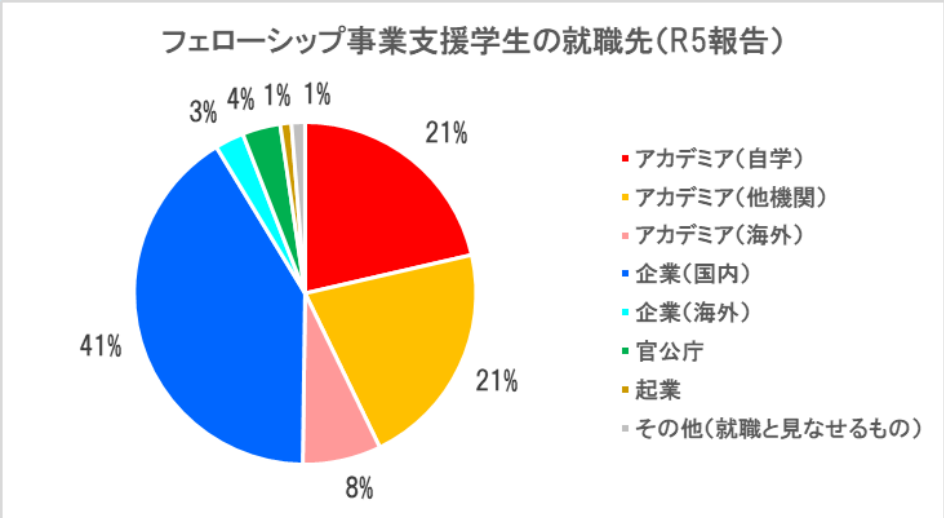
（参考）有効性に関わるデータ（多様なキャリアパスの実現に向けた取組の実施に関して）

※ いずれも科学技術振興機構(JST)調べ

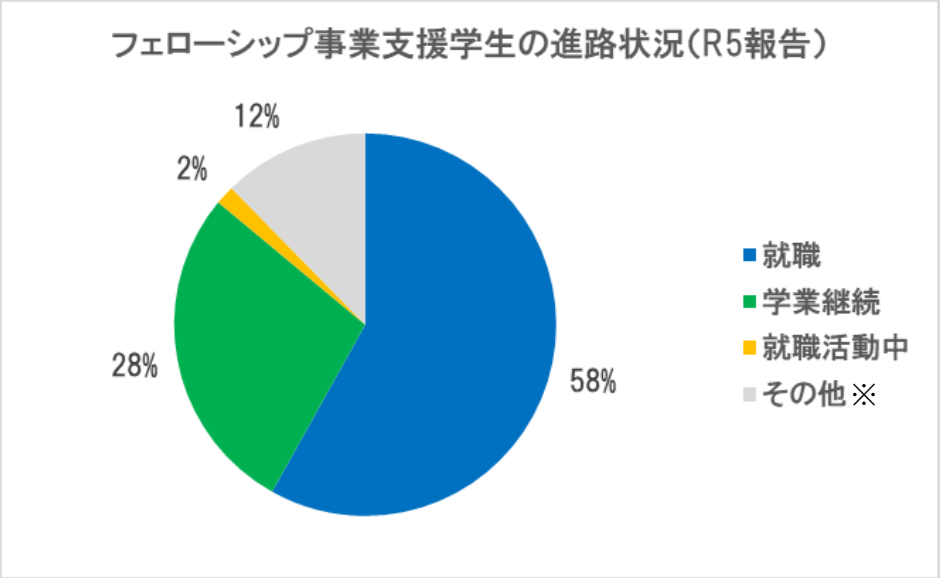
支援学生に対するアンケートの回答（キャリアパス支援のための取組について）



課程修了した支援学生（フェローシップ事業）の就職先（令和5年度）



支援を終了した学生（フェローシップ事業）の就職状況（令和5年度）



進路	人数
就職	466
学業継続	224
就職活動中	13
その他　※	99
合計人数	802

※就職予定のものを含む

※**学業継続者を除いた場合の就職率**
＝（「就職」＋「その他」のうち就職とみなせる者）/（支援を終了した学生-「学業継続」）
＝（466＋6）/（802-224）
＝ 0.817…（**＝約81.7%**）

（参考）
「学校基本調査」に基づく、令和5年度の博士後期課程学生の就職率は70.0%

振り返りの結果～効率性～

本事業の効率性

評価項目（案）	評価基準（案）	
人材育成の手段やアプローチの妥当性、計画・実施体制の妥当性	定性的	効果的・効率的な実施体制・制度設計となっているか

○　博士後期課程進学にあたっての阻害要因である、経済的な不安やキャリアパスの不透明さの解消の手段として、学生個人への直接的な支援ではなく、**各大学の全学的な戦略の下で、博士後期課程学生への経済的支援と、多様なキャリアパスの実現に向けた取組を一体として実施する大学を支援する**こととしたことは、支援人数の確保の観点や、状況に合わせた柔軟な事業の運用の観点で、効果的・**効率的な支援であった**と言え、引き続きSPRINGでも実施されている。

○　本事業を契機として、各大学が独自で博士後期課程学生支援の取組を実施するなど、**博士後期課程学生に対する、各大学の執行部や事務局の意識を変えた**ことは大学側への政策的なアプローチとして効果的であったと評価できる。

○　加えて、本事業は、創発的研究推進基金で実施されていたSPRINGと令和4年度に財源を一体化し、令和6年度からはすべての採択プロジェクトがSPRINGに統合された。これにより、**フェローシップ事業により得た知見を活かしつつ、大学、文科省及びJSTにおける事務負担等の軽減や学生の利便性の向上を図ったと言える**。

○　以上より、**本事業には効率性はあったものと評価できる。**

本事業の総合的な振り返り（案）

振り返りの概要

○ 以上により、**本事業は、必要性・有効性・効率性それぞれがある取組**であった。

○ また、本事業を実施するにあたって見つかった特長や課題は、後継事業であるSPRINGの事業設計や運営にも生かされており、

- **支援額の上限額の引き上げ**
- **キャリア支援のための大学事務費の措置等産業界を意識した多様なキャリアパス支援**　　など

充実した博士後期課程学生支援が行われている。
そのため、**「博士後期課程学生の支援事業のパイロット」として役割は果たした**ものと言える。

○ よって、**本事業は、優秀な人材の輩出や多様なキャリアパスの構築に一定程度の役割を果たした取組**と言える。

政府方針への貢献

○ 本事業は、「第6期科学技術・イノベーション基本計画」（R3.3.26閣議決定）で示された、**在学中の生活から修了後のポストの獲得まで両方を一体的に支援するフェローシップ事業の創設、所属機関を通じた経済的支援の促進**という**政府方針に合致した事業**であった。

○ 実際に、経済的支援が開始されたことや、アカデミアに限られないキャリアパスが一定程度構築されたこと、さらには博士後期課程全体の進学率も増加傾向に転じていることから、**上記政府方針の達成に一定程度の役割は果たした**と考えられる。

今後の展望

○ SPRINGにおいて、**継続して優秀な博士後期課程学生の育成・確保に努めつつ、より一層の成果創出を期待する**。

○ 本事業において、博士後期課程学生の数の増加とキャリアパスの多様化という目標は一定程度実現ができたものの、博士後期課程学生への支援の全体像として、さらなる支援規模の拡大のために、**多様な財源を活用した博士後期課程学生への給与の支給による研究者としての雇用などの様々な方策を検討するべき**である。

○ また、今後のSPRING事業の事業評価等も見据えて、JSTにおいて引き続きデータを収集すべきである。